

# 中国語教育学会会報

第10号(通巻35号) 2004年4月16日発行

## 中国語教育学会

下記事務局へのご連絡は郵便で  
東京都世田谷区桜上水3-25-40  
日本大学文理学部中文研究室内  
郵便番号 156-8550  
郵便振替口座 00110-1-191152

## 第2回全国大会に80名を越える出席者 04～05年度役員選挙で依藤新会長を選出

03年度の全国大会は去る3月27日(土)に事務局所在地の日本大学文理学部百周年記念館で開かれた。年度末にもかかわらず80名を越える出席者があり盛会であった。大会に先立ち郵便投票で実施された次期役員選挙の開票結果が会員総会で公表され、またこの選挙により選出された新理事による互選で新会長には東京外国語大学の依藤醇(よりふみち)氏が選出された。

会長委嘱による理事については、事務局の引き継ぎ等と共に、新会長の構想に基づく体制作りのなかで決められることになる。去る4月6日に引き継ぎ作業の打ち合わせを行ったが、5月には役員から事務局までの体制を固め、新たな活動を展開できる見通しが得られた。詳細は次号会報(5月発行予定)に掲載される。なお事務局交替などのため月例会は6月から再開の予定。

### 中国語教育学会 04～05年度役員選挙 開票結果公表

次期役員選挙については、03年秋の理事会決定により郵便投票で行い、大会に先立って全会員に被選挙人名簿兼投票用紙を郵送し、6名連記で、12名を選出することとした。投票期間は10日間ほど設け、04年3月13日消印まで有効とした。3月15日に加藤晴子理事、桑野弘美会計監査、島田亜実幹事らが開票委員となり、下記の開票結果を得た。会員総会では開票委員を代表して、加藤晴子理事が開票結果を公表した。

投票総数 106, 有効票 104(うち白票2), 無効票 2、ほかに15日と16日の消印が各1通あった。

(以下は得票順、敬称略、数字は票数、会則により就任時68歳の者があれば除外する規定)

依藤醇 35、平井和之 31、相原茂 28、遠藤光暁 28、古川裕 28、荒川清秀 22、武信彰 22、榎本英雄 20、郭春貴 19、佐藤富士雄 18、高橋弥守彦 16、守屋宏則 16、大川完三郎 14、日下恒夫 12、陳文正 12、平井勝利 12、三宅登之 12、沈国威 9、山崎直樹 9、吉田隆司 9、西川優子 8、山田眞一 8、小川文昭 7、加藤晴子 7、小林二男 7、塚本慶一 7……(6票以下の得票者は省略する)

この選挙による選出12名のほか、会長指名による理事を加え、新役員の全容は次号会報に掲載する予定である。

会長の選出については、03年秋の理事会決定により、上記選挙で選出された理事のうちから互選することとし、大会当日に新理事会(出席者:依藤醇、平井和之、古川裕、荒川清秀、武信彰、郭春貴、佐藤富士雄、高橋弥守彦、守屋宏則の9名、敬称略)を開催し、依藤醇氏が互選された。総会において、この新会長選出結果も報告され、新会長自身から受諾の意志が表明された。

# 中国語教育学会 第2回大会 会員総会 記録

中国語教育学会第2回大会の会員総会は、現理事のなかから郭春貴、大崎雄二の両氏を議長に選出して開かれた。以下に、今回の総会で報告された事項、議決された事項をしるす。なお、総会の出席者は57名であった。

## 会務報告

①会員総数 306名（注：2004年3月15日現在）

上記の数字には、03年度末退会予定者2名と、除籍予定者4名を含む。

※会費が2年間にわたり未納(年間2回請求)の場合は3年目に会員資格を失う。

②会費納入状況

2003年度会費納入済み 234名、未納者72名、納入率76%。

## 会計報告

2003年度決算報告 (03-3-19前年度会計監査日から04-3-15今年度監査日まで)

**収入** 教育学会会費 1,258,000  
       内訳 03年度会費234名分  
           02年度会費 19名分  
           ※前年度払い預かり金7000円を減ず  
       教育協議会会費 10,000  
       寄付金(1名) 2,000  
       会費次年度分先払(4名)20,000  
       学会誌売上(30冊)\*注1/ 33,600  
       小計 1,323,600  
       前年度繰り越し金 1,394,252  
           ※前年度繰り越し金は会報第5号の会計報告を参照。  
       合計 2,717,852  
       次年度繰り越し金 1,745,983  
       注1/ 学会誌第1号は頒価1,600円  
           (7掛で納品)で内山書店に委託。  
       次年度繰り越し金 1,745,983  
           (うち約47万円は支出予定:注2)

**支出** 幹事手当 120,000  
       バイト報酬 12,000  
       学会誌印刷費 166,500  
       会議費(例会) 21,130  
       “(理事会) 80,226  
       “(事務局) 163,863  
       郵便費 209,250  
       事務用品費 5,900  
       交通費 93,000  
       大会費(第1回昼)100,000  
       合計 971,869

3月15日会計監査後に今年度分支払い予定として、学会誌第2号印刷費約37万円と第2回大会費10万円の支出がある。\*注2  
 注2/ 会計年度を監査日から翌年の監査日までとしているため、監査日後の年度内支払い分が次年度繰り越し金に含まれている。

以上の収支について04年3月15日に桑野弘美、加藤晴子の2氏が監査を実施し(会計監査針谷壮一氏は外国出張中のため加藤理事が前任者として代行)、下記の通り署名捺印を得ている。

証票と照合した結果、上記の通り誤りはありません。

2004年3月15日

桑野弘美 (桑野)

加藤晴子 (加藤)

【おわび】 大会当日、参加者全員に配布した議事資料は上記支出の6項目にわたって誤記があり、支出合計額と合致せず、総会にて説明の際に口頭で訂正いたしましたが、この会報所載の金額が正しいものです。おわびを申し上げるとともに前記議事資料の決算、支出部分を取り消します。

## 2004年度予算案

(カッコ内はp.2掲載の前年度支出額を参考のために再録)

<u>収入</u>	会費収入	1,200,000	
	会誌売上	40,000	
	繰り越し金	1,745,983	
	合計	2,985,983	
<u>支出</u>	幹事手当・報酬	130,000	( 132,000)
	学会誌第2号印刷費	370,000	( 166,500)
	諸会議費	250,000	( 265,219)
	郵便費	320,000	( 209,250)
	事務用品費	20,000	( 5,900)
	交通費	100,000	( 93,000)
	大会費(第2回)	100,000	( 100,000)
	プロジェクト事業費	100,000	( 0)
	合計	1,390,000	

※この予算は、ほぼ現在の会員規模と活動内容で学会を続けて行くという前提に立つものであるが、それを支える会費収入120万円は納入率約80%に相当し、この納入率を高めるか、繰り越し金による赤字補填に頼るかなければ維持できない。補填の原資は3~4年でほぼゼロになる。

## 役員選挙(開票結果報告)

p.1に掲載。

## 今後の学会運営について

04年度は新しい役員による学会運営となり、事務局所在地については新会長のもとで検討し、p.1所載のように、5月には会員各位にお知らせすることとしたい。

## 学力基準プロジェクト(仮称)について

会報第9号の理事会報告で取り上げたように、中国において外国人に対する中国語教育をあつかう国家漢辦の組織と活動が強化されていることに鑑み、今後この漢辦とのつながりを深める必要がある。その場合、漢辦が実施しているHSKの問題も視野に入れなければならない。さらに関連して、日本における中国語教学大綱、学力基準等も学会として取り組むべき課題になってくる。学会内でこのプロジェクトを推進する小委員会を発足させ、委員長(座長)には奥水前会長が就任することが議決された。近日中に、委員長からメンバーに打診を行い、委員会発足後できるだけ早く日本版教学大綱、学力基準の検討案を提示できるように進めて行くことになる。

## その他

会員総会で、学会に顧問を置くことが提案され、審議の結果、現行の会則第6条(役員)に顧問の項を設けることと、関連する事項の検討について理事会に一任することが議決された。

【学会誌第2号発行】学会誌《中国語教育》第2号が大会当日に発行された。当日の参加者には直接配布されたが、欠席された方々にはこの会報とともに郵送する。なお別途購入を希望される方のため創刊号と同様に書店に委託して販売する予定だが、直ちに購入希望の方には4月30日まで現事務局で申し込みを受け付ける。第2号の頒価は理事会にて2,500円と定めたが、郵送料込みで80円切手34枚(2,720円分)の送付があれば、直接お送りする。その際、依頼状あるいは封筒に記載の住所氏名をコピーして宛て名に使用するので、誤りのないように明記していただきたい。5月以降は事務局移転などが予定されるので、書店の委託販売をご利用いただきたい。

## 第2回全国大会 研究報告 発表要旨 再録

大会に参加されなかった会員のため、報告者が事前に提出した「要旨」を順次この会報に掲載する。

### 実際の用いられ方に基づく動態助詞“着”の教え方

三宅 登之

(東京外国語大学)

持続義を表す動態助詞“着”は、次のように[A]状態の持続(静態)と[B]動作の持続(動態)の両方を表すことが可能であるとされる。

他穿着一身新衣服。(静態)

他们正看着节目呢。(動態)

ところがこの両者は、“着”はそういう意味で「用いることができる」というだけであって、実際にそれらが同じように「用いられている」ということは意味しない。刘月华等 2001 によれば、両者は実際には主に次のような用いられ方をしているという。

#### [A]状態の持続(静態)

- A1. 連動文の第一動詞 坐着讲  
A2. 存在文 墙上挂着一幅水墨画。

#### [B]動作の持続(動態)

- B1. 命令文 你先歇着，我出去看看。  
B2. 文学作品中の背景説明 交通艇嗖嗖地向前疾驶着。  
B3. 说着～ (狼)说着，就向东郭先生扑去。  
B4. V 着 V 着 孩子哭着哭着睡着了。

上記[B2]類に対する刘月华等 2001 の極めて刺激的なコメントを待つまでもなく、実際には[B]動作の持続(動態)はその使用に一定の傾向があり、使用頻度は低い。[B3][B4]もいわば中級レベルで提示する個別の現象だとすれば、第二外国語等の初級レベルでは、“着”の動作の持続の用法は提示せず(あるいはそのような例文を混在させず)、“着”は専ら状態の持続を表すと提示したほうがよい。これにより、

(1) 上記[A1][A2]は、従来連動文や存現文の項目の箇所では用例が提示されてきたと思われるが、“着”を使う形式として強調すれば、文型とリンクさせて覚えることができる。

(2) 動作の持続に言及しないことによって、動作の進行を表す“在”との混用が減少する。

等の効果が期待できる。

本発表では、“着”の働きは「動作の背景化」であるというコンセプトから上記の現象に統一的な解釈を試み、その妥当性を検討するとともに、実際のテキスト等での記述のモデルケースも考えてみたい。

#### <参考文献>

- 方梅 2000 「从“V 着”看汉语不完全体的功能特征」,『语法研究和探索(九)』,商务印书馆。  
刘月华、潘文娣、故韡 2001 『实用现代汉语语法(增订本)』,商务印书馆。

【お知らせ】 大会当日、研究報告会で報告者が配布した資料に若干の残部があります。ご入用の方は現事務局に80円切手6枚をお送りください。フルセットは12セットのみですが、一、二点を欠くセットは20組余あります。その場合、送付された切手が余れば80円単位でお返しします。